

京都東山（徳富蘇峰）

三十 六峰 雲 漠々

洛中 洛外 雨 紛々

破笠 短褐 来て 涙を 揮う

秋は 冷やかなり 殉難 烈士の 墳

三十六峰雲漠漠 洛中洛外雨紛紛  
破笠短褐來揮淚 秋冷殉難烈士墳

解説 この詩は京都東山にある坂本竜馬・中門慎太郎らの墓に参拝したときのもの。

語釈 ※三十六峰||京都東山の峰々。 ※漠漠||広くとりとめのないさま。 さびしいさま。 ※洛||京都のこと。 中国の洛陽の都から転じた。 ※洛中洛外||京都の市中と郊外。 ※紛紛||乱れ降るさま。  
※破笠||「笠」は笠。 または唐傘。 ※短褐||布子。 丈の短いそまつな布でつくった着物。 ※揮||まきちらす。 ぼたぼたとおとす。  
※殉難||国家の危機を救うために命をすてること。  
※烈士||気性がはげしく節義を守る人物。  
※墳||墓。 土を高く盛りあげた塚。

通釈 東山三十六峰は一面の雲におおわれて、さびしく、もの寂しい。 京都の町中も郊外も雨が乱れ降っている。 この雨の中を破れ笠をかぶり、ぬのこをまとい、殉難烈士の墓前に涙を流してぬかずけば、秋気はこのほか肌に冷たく感ずるのである。